

第38号  
平成18年10月  
編集発行  
津和野の歴史を  
自然と歴史を  
守る

# 錦秋の津和野

会長 布施 高

山陰の小京都として著名な当町にも街中が華やく秋の到来です。昭和の初期に津和野十二景が選定され、春秋を通じて町民憩いの場所として賑わったという記述があります。

その十二景とは、青野山・松林山(天神山)。永明寺・大橋・弥栄神社・太鼓谷稲成神社・嘉楽園・城山・鳴滝・鷲原八幡宮・玄武社(津和野神社)・白糸の滝です。

今もその多くが憩いの場、観光スポットとして訪れる人々を受け入れています。それも、優れた景観によるものと考えられます。

その十二景の内、秀峰青野山の遠望はかつての優しい面影が失われ雑木の生い茂る山という感がします。往時の青野は奈良の若草山を彷彿させる柔らかな緑に覆われて優しい山という印象が強く、山麓



▲松林山(天神山)

の草原は旧藩時代の練兵場として、また、その後は青野ヶ原として同じ白山火山脈系の大山の鏡ヶ成、三瓶山の佐比売野同様、憩いの広場として多くの人人に親しまれて来ました。当時は家畜の飼育が盛んで牧草の需要がやさしい景観を造成していたものと考えられます。しかし現在は荒れ野ヶ原に変貌している様です。また、紅葉が楽しめる天神山

への道は国道九号線により切断され、神社への参詣や紅葉狩りは危険が伴う現状です。せめて地下通路でもあればと悔やまれます。

城山・永明寺・弥栄神社・嘉楽園・鷲原公園の紅葉は八十年を経た今も良く管理保存され訪れる人の目を充分楽しませていきます。特に永明寺の紅葉は今が見頃で、山陽方面から毎年必ず訪れるという人達によく出会います。この十二景の他、現在では殿町の醸す景観が津和野観光のメインとされています。

## ○景観法の制定

昨年「景観法」が制定され今年の六月施行となりました。この法律の目的は、わが国の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定、その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で



▲鳴滝

活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的に制定されたものです。

また、基本理念としては良好な景観は、美しく風格のある国土の形成と潤いのある豊かな生活環境の創造に不可欠なものであることに鑑み、国民共通の資産として、現在及び将来の国民がその恵沢を享受できるように、その整備及び保全が図られなければならない。

二つ目として、良好な景観は、地域の自然、歴史、文化等と人々の生活、経済活動等との調和により形成されるものであることに鑑み、適正な制限の下にこれらが調和した土地利用がなされること等を通じて、その整備及び保全が図られなければならない。三番目として、良好な景観は、地域の固有の特性と密接

に関連するものであることに鑑み、地域住民の意向を踏まえ、それぞれの地域の個性及び特性の伸長に資するよう、その多様な形成が図られなければならない。

更に四番目に、良好な景観は、観光その他の地域間の交流の促進に大きな役割を担うものであることに鑑み、地域の活性化に資するよう、地方公共団体、事業者及び住民により、その形成に向けて一体的な取り組みがなされなければならない。

五番目として、良好な景観の形成は、現にある良好な景観を保全することのみならず、新たに良好な景観を創出することを含むものであることを旨として、行わなければならないとあります。

当町でもこの程景観計画策定委員会が発足し、積極的な検討を始めることとなりました。恵まれた自然・文化を有する郷土を守り育てる事を目的として創設された当会の活動も、この「景観法」に後押しされながら進めて行かなければならないと思っております。

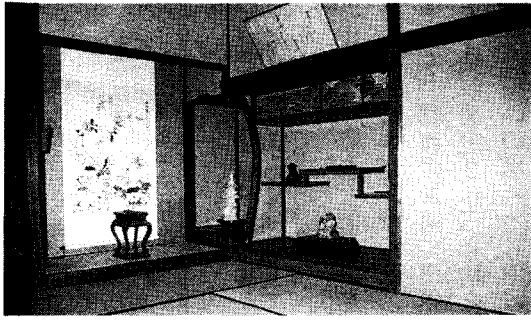
# 萩・大井・奈古II史跡探訪

村田 進

本年度第一回史跡探訪は吉見氏ゆかりの地、萩大井地区を中心に計画し、六月二十四日に二十一人の一行で出発しました。梅雨の季節でしたが天候にも恵まれた一日でした。

## ■森田家住宅（国指定重要文化財）

萩市街に入る峠手前に在り初代は吉見家臣で開田の功で毛利時代に庄屋となり、当時の屋敷構えが良く保存されている。藩主の鷹狩りの際の休み所で、お成りの間の座敷に一回も上がらせていただき、



▲森田家＝お成り座敷（上座敷の床）

ご当主と奥様の説明を受けました。襖障子も当時の物で往時を偲ぶ事が出来ました。吉田松陰の叔父大助の妻久満は当家の出で松陰も度々訪れていたと伺いました。

## ■団子巖

維新の先覚者吉田松陰の生家杉家が大火のため、東光寺裏山に当たる通称団子巖に住んでいた小高い丘に、二十六石（実禄十三石）半土半農の家に松陰は天保元年（一八三〇）生まれた。六畳二間三畳三間に台所、納屋の狭い屋敷跡はそのまま見る事が出来る。この家に父百合之助、母滝、祖母叔父二人兄弟妹三人外十

一人が生活した。眼下に一望できる萩城下。城のある指月山、日本海が見渡せる景勝の地で、周囲に人家は無く隔絶された自然に恵まれた環境である。近くに国外密航を企てた松陰と金子重輔の銅像が萩城下を見ている。その側に杉家、玉木家、吉田家久坂玄瑞

の墓、高杉晋作の墓が並び左側に「松陰」二十一回猛士墓」と刻まれた自然石の墓がある。安政六年（一八五九）十月二十七日伝馬町の牢で処刑され、

遺髪を埋めた墓前で家族と松下村塾の弟子高杉晋作、久坂玄瑞達が集まり、百日祭が執り行われた。墓前に弟子達が寄進した灯籠、水盤が供えられている。杉家は後に今の松下村塾の所に移った。

## ■吉見正頼、広頼の墓

大井地区櫛山に吉見十一代領主正頼と、十二代広頼の墓が並んでいる。正頼は天文の役で三本松城主として陶晴賢軍を迎え、六ヶ月の攻防戦を戦い、後年萩、阿武地方も領有し萩城のある指月に隠居した。広頼は（妻は毛利隆元の娘妙悟）亀王丸と名乗った十三才の時（一五五四）三本松



▶吉見正頼公墓（右側）吉見広頼公墓（左側）

城合戦和睦の人質となった事もある。後年毛利輝元が安芸の国から転封となったため櫛山に居を移した。十四代広行の時に吉見家は断絶となり、後は大野毛利家として明治まで続いた。

## ■周鷹寺

津和野永明寺の末寺で正頼の法号月佐周鷹より名付けられた。一同は本堂に上がり、ご住職三上雅祥様に読経して戴き位牌を拝み、吉見一族の珍しい軸も拝見させて頂いた。

## ■正楽寺（浄土宗）

吉見家四代領主弘信第二子正楽の開基で、明治六年学制が發布され正楽寺が大井小学校の仮校舎となった。

## 大覚寺を探訪

（山口県阿武町奈古）

### 潮 明

萩市大井に隣接した阿武町奈古の中心部に大覚寺（曹洞宗）があり、その左の後山にあたる所に山陰の雄で尼子氏の嫡流義久の墓がある。大覚寺御住職末益泰輝様より

## ■大井八幡宮

社歴は古く、永観二年（九八四）よりこの地に小宮が建つ。吉見正頼も天正六年（一五七八）上尊檜皮造営をし絵馬も寄進した。大井地区は古墳時代から栄え、大塔があつた大寺が建てられ古くから開けた土地である。『ふるさと大井』によると、二度の蒙古軍襲来の後、弘安五年鎌倉幕府の命で西国沿岸防備のため下向した吉見家初代頼行は、一族七騎と共に大井本郷に進駐し、櫛山に砦を築き備えたと伝えられる。現在も鷄山半島に壘と称する石塁と、海岸沿いに何キロにも渡って石塁が残されている。

資料をいただき、本堂で詳しくご説明を賜りました。  
1. 大覚寺は長久三年（一〇四二）当時は光応寺と言つてこの時の開基は永満法師で宗旨は真言宗であった。  
元亀元年（一五七〇）津和野永明寺の第六世住職、日峯永舜大和尚に依つて堂宇が再建。自ら開山となり永明寺系統の曹洞宗に改宗した。



▲尼子義久公木像(左側) 永明寺第六世日峯永舜大和尚木像

二世天粧寿心大和尚は、吉見広頼が慶長年間に、永明寺から招請したものである。さらに、大井の周鷹寺も寿心大和尚が開山し吉見氏の菩提寺として知られている。寿心大和尚は、実は尼子一族(尼子国久の三男)で、尼子義久の又叔父にあたるが、尼子氏の宿敵毛利氏の一味である吉見氏の菩提寺を開山したこと、も奇しき因縁ともいえよう。尼子義久は慶長五年(一六〇〇)頃、毛利氏の客分として長門に移り来て奈古、紫福両村に給地、二九二石を受け奈古で余生を送り、慶長十五年(二六一〇)八月二十八日逝

去、法名は大覚寺殿大門心覚大居士と言った。以来、光応寺を大覚寺と改称、尼子義久を開基とした。

現在大覚寺には義久の位牌と、彼であると言えられる木像が寺宝としてあり、今回拝観させていただきました。

## 2. 尼子義久について

尼子氏は近江源氏佐々木氏の一族で、尼子持久の時、京極氏(尼子氏の本家)の出雲守護代として雲州尼子の祖となった。出雲の富田月山城を拠点とし、出雲ほか八ヶ国の守護として山陰山陽に武威を誇り、中国の覇者大内氏にとっても毛利氏にとっても数々の戦歴を綴る宿敵であった。

一代の梟雄であった尼子経久そして晴久に次いで、永禄三年(一五六〇)義久は父晴久(諱久)の死により出雲國の守護となる。

その頃大内氏に代わって芸備、防長四カ国の大守となった毛利元就は、若い義久が当主となった尼子氏を攻略の好機として、永禄五年に石見路に侵入、大内氏以来争奪戦の中心となってきた大森銀山をまず奪回した。

因みに大森銀山を制する者が中国地方の覇者になるといわれていた。そして元就は、尼子氏の本拠である富田城を持久戦で総攻撃して、永禄九年十一月(一五六六)山中鹿之助等の活躍もむなしく、尼子氏は遂に開城降伏して毛利氏の軍門に降った訳である。

なお、津和野亀井氏の始祖とも言うべき亀井安綱(能登守と称す)は、尼子経久、晴久、義久の三代の重臣として仕え、最後まで義久と行を共にした。

後日、津和野藩主となった亀井氏にとって、尼子氏は旧主筋にあたるが、亀井氏の重臣には尼子氏の一族か、重代の遺臣達が多い。

富田城を出た義久は、倫久、秀久の二弟とともに、毛利氏の本拠芸州長田の円明寺に幽閉され、約三十年余を経て長門、奈古に移ったが、当初から尼子氏再興の気持ちは捨てたのであろう。

義久には嗣子がなかったの、弟倫久の子、元知を養子とした。元知はその後、毛利氏の家臣となり、元知の子就易の時に佐々木の本姓に復し

て、萩藩寄組・佐々木家(一千石)の祖となり幕末まで続いた。


知行地の山口市平野には、佐々木屋敷跡として、僅かに土堀が残っている由である。(尼子義久の墓所)

大覚寺の参道の左側に巨大な宝篋院陀羅尼塔が池の中に建立されているのを見、後山に尼子義久の墓(五輪塔)がある。傍に「尼子義久公の墓」の墓標があり、その左側の野づら石(自然石)が、弟



▲尼子秀久公墓 尼子義久公墓

の秀久の墓である。前面の石灯籠二つは、後孫佐々木実久の建立したもので、墓所は石柵で取り囲まれて、柵の節目には京極尼子氏の家紋「平四

つ目結」 が刻印されています。

大内氏、毛利氏を宿敵とした尼子氏の一族が、大内、毛利の領国で弔われているのも、また戦国時代の一つの姿でありましょう。然しながら萩藩毛利氏は、戦国の非運の名族に對しては、意をはらって、たようで、尼子氏については、寄組・佐々木氏を通じ、又旧津和野藩吉見氏については、一門大野毛利の一族として、その血脉を保たせた事は特筆すべきと思います。

最後に、大覚寺の境内には、参道の両側に、山口県下最大のビヤクシン(白杉)の大樹が一本づつあります。右側に高さ約十五メートル、左側に約十七メートルで山口県の天然記念物に指定されており、すが、大覚寺の昔ながらの趣を感じさせてくれるような風景でありました。

### 【参考資料】

(1) 防長歴史探訪

著者 土屋貞夫・清水唯夫

発行 山口銀行

(2) 補陀山 大覚寺(奈古の歴史)より

著者 大島 康正

発行 阿武町教育委員会

## 吉見氏の伝書

## 裾 坂 庄 之 進

津和野の地に初めて足を踏み入れた吉見氏については文献が極めて少なく、点々と出てくる古文書を頼りに、地元

の古老を尋ねながらの調査を続けているが、この度初めて

「吉見氏戦功文書聞書」を手にすることが出来たので、その概要を紹介する事とした。

この書の末尾に次の事が記されている。

右の書は戸田綾部氏の汁物を求めて写すものなり。尤もこの書直地管令下森氏とこれあり。

慶応二年七月十九日

○吉見氏石見国え初めて入部したのは、弘安五年（一二八二）十月八日木曾野に来居する。清和天皇より十七代吉見三河守式部四郎源頼行、舎弟孫四郎頼孝同時に供奉し、横田村に住すこの時から横田氏となる。

○頼行永仁三年（一二九五）

津和野喜時雨三本松に縄張り、地曳し城を築いて移る。

○入部の折勸請した鶴岡八幡宮分幣を木部中組に祀り同年津和野に移祀する。

○吉見氏代々官軍なりこれにより年々在京あり禁庭石見部屋に宿陳する。吉見弘信代一家の家来頼右化鳥射落す。其時に青江安次の御太刀・御沓を下し給う。この二色下森仁右衛門手許に之有しを子孫亡絶により、聲齋藤丹後守孫与右衛門に渡り今杓柿木庄屋宅に之有り。

○吉見頼弘永明寺を開基法名大年道椿と云う。

○大内殿百濟より周防国右田下野に来朝す。賢称二年（五七七）其七年前（師安五年）周防下松え来朝、鏡常元年（五八一）同徳山幾野屋の鷲頭村に之有。

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

野吉見大内蔵大輔正頼代石州二郡、長門阿武郡萩指月城迄。防州徳地郷残すこれを伏せ、権現の塙の城迄豊前菊郡一郡都合五千百町、当時新沢の沙汰に積れば三十二万石の預り高なり。高七百石より四十五石迄馬侍七百八十騎これあり、本城は三本松城、下瀬山城、吉賀萩尾城右の三ヶ所の城なり。

其外取手（砦）本丸は矢折の城、脇元の城、長門の内嘉年城、井戸同片俣の城、三原城、野坂夕倉城、萩指月城、同椿の城、豊前菊郡田邊城、吉賀は五瀬谷口の関、福川の郷主齋藤丹後守、柿木給人西塔善兵衛尉、大井谷の給人三浦助七郎等預かり堅く締め番する。横道関守後藤称十郎。

○田丸横山の城主は大野原の領主吉見宮内少輔弘景、棧敷の後藤三郎兵衛、落合左近、木部領主羽隔壹岐守、村上三左衛門、堀小太郎これなり。

○能美山の城主は吉見越後守、萩椿郷の地頭横田孫四郎。その子横田大四郎、七日市給人渡辺木工之助、尚拔廻領主鳥居伊豆守、同甚左衛門、葉生の領主吉見彈正忠、その他朝

倉の領主吉原左馬助、田の原給人三家本三十郎等なり。

○五郎万淵城主は広石の領主上領伊豆守、同玄番、その他長門木与村領主福井大炊、広石給人同九右衛門、立戸給人大庭小五郎、野中地頭竹内縫殿、注連川給人重藤丹波守等なり。

○萩尾城主竹内豊後守弘時、同舎弟七兵衛与力、矢折の領主片山若狭守、岡野左衛門、同彦四郎是也。

○陳外の城主長嶺周防守、舎兄下野守、上領甚兵衛（後名肥後）吉賀掃戸助これなり。

○茶臼山城主長嶺伊豆守、舎弟新五右衛門、沢田給人吉賀弥五郎。

○周防境松柄峠関、弥川玄番、大庭石見守、同与四郎、難波惣兵衛、梅月新兵衛、何れも吉賀郡上領の住人なり。吉見家大内家大内義隆代に手切れとなりかくのごとし。

○其前天文十二年（一五四三）吉見隆頼山口にて死亡後継がなく吉見家断絶すべき処に隆頼の兄慶正と申者あり、現俗させ吉見家続く大内蔵大輔正頼なり。義隆深川において陶に討果されし時義隆公より元

就・正頼両所に、内心書なされ陶を急討亡し候様にと相良遠州を以被仰越候。それより山口を手切に相成候時分右の城に人数をこめ油断なく守、意案の如く陶江浦都合五万人にて津和野を五ヶ月攻むれど、城固くその上勇強の者共多人数籠り居り、なお安芸の毛利元就より坂中村等加勢故連よく退出、直ちに宮島に渡る吉見正頼は直ちに山中道を経て地御前に打出し毛利と一つになり宮島にて打ち亡し仕候こと。

○吉賀八幡宮の御事は上古久しく立河内畑塚小森と申所の御座候を、正中二年（一三二五）広石の岩中嶋え社官能美玄番勸請して、それより十五年後（興国元年）平岩に移し其後京官ヶ谷の尻金五郎名金王山の森に移す。又異説によると日本開きて貴賤を知らず、言語も通ぜかねたる頃に何人と言うことは聞ず伝えに、日向国え異国の船着きて日州井谷の郷三郎と言う者、語らい切開き村里出来それより石見の高津浜に至りて、銀阿弥と言う者に案内させ高津より川上え切り開き吉賀郡立河内ま



▲尼子義久公木像(左側) 永明寺第六世日峯永舜大和尚木像

第二世天植寿心大和尚は、吉見広頼が慶長年間に、永明寺から招請したものである。さらに、大井の周鷹寺も寿心大和尚が開山し吉見氏の菩提寺として知られている。寿心大和尚は、実は尼子一族(尼子国久の三男)で、尼子義久の又叔父にあたるが、尼子氏の宿敵毛利氏の一味である吉見氏の菩提寺を開山したこと、も奇しき因縁ともいえよう。尼子義久は慶長五年(一六〇〇)頃、毛利氏の客分として長門に移り来て奈古、紫福兩村に給地(二九二石を受け奈古で余生を送り、慶長十五年(一六一〇)八月二十八日逝

去、法名は大覚寺殿大門心覚大居士と言った。以来、光応寺を大覚寺と改称、尼子義久を開基とした。

現在大覚寺には義久の位牌と、彼であると伝えられる木像が寺宝としてあり、今回拝観させていただきました。

2. 尼子義久について

尼子氏は近江源氏佐々木氏の一族で、尼子持久の時、京極氏(尼子氏の本案)の出雲守護代として雲州尼子の祖となった。出雲の富田月山城を拠点とし、出雲ほか八ヶ国の守護として山陰山陽に武威を誇り、中国の覇者大内氏にとっても毛利氏にとつても数々の戦歴を綴る宿敵であった。

一代の梟雄であった尼子経久そして晴久に次いで、永禄三年(一五六〇)義久は父晴久(諱久)の死により出雲国の守護となる。

その頃大内氏に代わって芸備、防長四方国の大守となった毛利元就は、若い義久が当主となった尼子氏を攻略の好機として、永禄五年に石見路に侵入、大内氏以来争奪戦の中心となつてきた大森銀山をまず奪回した。

因みに大森銀山を制する者が中国地方の覇者になるといわれていた。そして元就は、尼子氏の本拠である富田城を持久戦で総攻撃して、永禄九年十一月(一五六六)山中鹿之助等の活躍もむなしく、尼子氏は遂に開城降伏して毛利氏の軍門に降つた訳である。

なお、津和野亀井氏の始祖とも言うべき亀井安綱(能登守と称す)は、尼子経久、晴久、義久の三代の重臣として仕え、最後まで義久と行を共にした。

後日、津和野藩主となった亀井氏にとつて、尼子氏は旧主筋にあたるが、亀井氏の重臣には尼子氏の一族か、重代の遺臣達が多い。

富田城を出た義久は、倫久、秀久の二弟とともに、毛利氏の本拠芸州長田の円明寺に幽閉され、約三十年余を経て長門、奈古に移つたが、当初から尼子氏再興の気持ちは捨てたのである。

義久には嗣子がなかったの、弟倫久の子、元知を養子とした。元知はその後、毛利氏の家臣となり、元知の子就易の時に佐々木の本姓に復し

て、萩藩寄組・佐々木家(一千石)の祖となり幕末まで続いた。

知行地の山口市平野には、佐々木屋敷跡として、僅かに土堀が残っている由である。(尼子義久の墓所)

大覚寺の参道の左側に巨大な宝篋院陀羅尼塔が池の中に建立されているのを左に見て、後山に尼子義久の墓(五輪塔)がある。傍に「尼子義久公の墓」の墓標があり、その左側の野づら石(自然石)が、弟



▲尼子秀久公墓 尼子義久公墓

つ目結」品が刻印されております。

大内氏、毛利氏を宿敵とした尼子氏の一族が、大内、毛利の領国で弔われているのも、また戦国時代の一つの姿でありましょう。然しながら萩藩毛利氏は、戦国の非運の名族に対しては、意をはらつていたやうで、尼子氏については、寄組・佐々木氏を通じ、又旧津和野藩吉見氏については、一門大野毛利の一族として、その血脉を保たせた事は特筆すべきと思います。

最後に、大覚寺の境内には、参道の両側に、山口県下最大のビヤクシン(白杉)の大樹が一本づつあります。右側に高さ約十五メートル、左側が約十七メートルで山口県的天然記念物に指定されておりますが、大覚寺の昔ながらの趣を感じさせてくれるような風景でありました。

【参考資料】

(1) 防長歴史探訪  
著者 土屋貞夫・清水唯夫  
発行 山口銀行

(2) 補陀山 大覚寺(奈古の歴史)より  
著者 大島 康正  
発行 阿武町教育委員会

## 吉見氏の伝書

## 裾坂庄之進

津和野の地に初めて足を踏み入れた吉見氏については文献が極めて少なく、点々と出てくる古文書を頼りに、地元

津和野喜時雨三本松に縄張り、地曳し城を築いて移る。

の古老を尋ねながらの調査を続けているが、この度初めて「吉見氏戦功文書聞書」を手にすることが出来たので、その概要を紹介する事とした。

○入部の折勤請した鶴岡八幡宮分幣を木部中組に祀り同年津和野に移祀する。

この書の末尾に次の事が記されている。

○吉見氏代々官軍なりこれにより年々在京あり禁庭石見部屋に宿陳する。吉見弘信代一家の家来頼右化鳥射落す。其時に青江安次の御太刀・御沓を下し給う。この二色下森仁右衛門手許に之有しを子孫亡絶により、智齊藤丹後守孫与右衛門に渡り今杢木庄屋宅に之有り。

右の書は戸田綾部氏の汁物を求めて写すものなり。尤もこの書直地管令下森氏とこれあり。

○吉見頼弘永明寺を開基法名大年道椿と云う。

○吉見氏石見国え初めて入部したのは、弘安五年（一二八二）十月八日木曾野に來居する。清和天皇より十七代吉見三河守式部四郎源頼行、舎弟孫四郎頼拳同時に供奉し、横田村に住すこの時から横田氏となる。

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○頼行永仁三年（一二九五）

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

○吉見頼弘代に津和野真清寺を建て、頼弘室九州菊地の娘法名真清と言う。この時津和

野吉見大内蔵大輔正頼代石州二郡、長門阿武郡萩指月城迄。防州徳地郷残すこれを伏せ、権現の塙の城迄豊前菊郡一郡都合五千百町、当時新沢の沙汰に積れば三十二万石の預り高なり。高七百石より四十五石迄馬侍七百八十騎これあり、本城は三本松城、下瀬山城、吉賀萩尾城右の三ヶ所の城なり。

其外取手（砦）本丸は矢折の城、脇元の城、長門の内嘉年城、井戸同片俣の城、三原城、野坂夕倉城、萩指月城、同椿の城、豊前菊郡田邊城、吉賀は五瀬谷口の関、福川の郷主齊藤丹後守、柿木給人西塔善兵衛尉、大井谷の給人三浦助七郎等預かり堅く締め番する。横道関守後藤称十郎。

○田丸横山の城主は大野原の領主吉見宮内少輔弘景、棧敷の後藤三郎兵衛、落合左近、木部領主羽隔壹岐守、村上三左衛門、堀小太郎これなり。

○能美山の城主は吉見越後守、萩椿郷の地頭横田孫四郎。その子横田大四郎、七日市給人渡辺木工之助、尚拔廻領主鳥居伊豆守、同甚左衛門、葉生の領主吉見彈正忠、その他朝

倉の領主吉原左馬助、田の原給人三家本三十郎等なり。

○五郎万淵城主は広石の領主上領伊豆守、同玄番、その他長門木与村領主福井大炊、広石給人同九右衛門、立戸給人大庭小五郎、野中地頭竹内縫殿、注連川給人重藤丹波守等なり。

○萩尾城主竹内豊後守弘時、同舎弟七兵衛与力、矢折の領主片山若狭守、岡野左衛門、同彦四郎是也。

○陳外の城主長嶺周防守、舎兄下野守、上領甚兵衛（後名肥後）吉賀掃戸助これなり。

○茶臼山城主長嶺伊豆守、舎弟新五右衛門、沢田給人吉賀弥五郎。

○周防境松柄峠関、弥川玄番、大庭石見守、同与四郎、難波惣兵衛、梅月新兵衛、何れも吉賀郡上領の住人なり。吉見家大内家大内義隆代に手切れとなりかくのごとし。

就・正頼尚所に、内心書なされ陶を急討亡し候様にと相良遠州を以被仰越候。それより山口を手切に相成候時分右の城に人数をこめ油断なく守、

意案の如く陶江浦都合五万人にて津和野を五ヶ月攻むれど、城固くその上勇強の者共多人数籠り居り、なお安芸の毛利元就より坂中村等加勢故運よく退出、直ちに宮島に渡る吉見正頼は直ちに山中道を経て地御前に打出し毛利と一つになり宮島にて打ち亡し仕候こと。

○吉賀八幡宮の御事は上古久しく立河内畑堺小森と申所の御座候を、正中二年（一三二五）広石の岩中嶋え社官能美玄番勸請して、それより十五年後（興国元年）平岩に移し其後京官ヶ谷の尻金五郎名金王山の森に移す。又異説によると日本開きて貴賤を知らず、言語も通ぜかねたる頃に何人と云うことは聞ず伝えに、日向国え異国の船着きて日州井谷の郷三郎と言う者、語らい切開き村里出来それより石見の高津浜に至りて、銀阿弥と言う者に案内させ高津より川上え切り開き吉賀郡立河内ま



で聞詰、其の時分よりの八幡ましましたると三言う説あり。  
○吉見頼行人国の時、羽隅・長嶺・竹内三人供奉し木部郷木蘭に來居の時一旅五世帶來り住す由と。

○正頼子息弘頼歳四才の時分益田全鼎吉見を攻め落し、尼子領に添えられるべきと益田七尾附近所々に出城を拵え用意す。吉見方は谷口下瀬山えは下瀬加賀守、同弥九郎、脇元の城には竹内豊前守頼時、同七兵衛、野登呂の城には梅付丹後守、中屋与治郎、同凶書、次子弥吉、古曾河内信濃守籠城三年益田と対陣す。その内下瀬脇元の領主加賀守、同弥九郎、竹内豊前守、同七兵衛、益田七尾え乗り込火をかけ藤兼親子を生捕り、吉田の毛利元就に渡す。その他一類を討果し津和野運をひらく。

打向い矢合せをし、紀州象に大きく崩れ大半が討死するこの度唐軍の大將……  
(この間欠書枚数不明……)候て帰郷津和野着の日頼死に付、右の恩賞御沙汰延引し故捨り申候。  
右同月之を書く

## 桐田露村の生涯

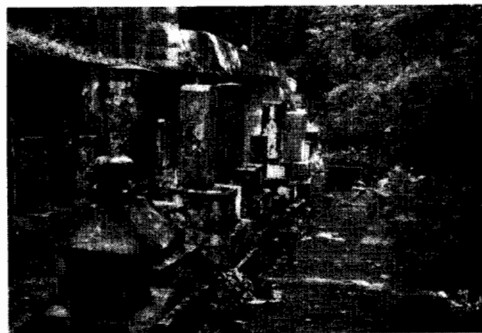
沢川 兼光

現在の短歌界で同人結社の大、中、小を併せれば、その数数百になるかも知れない。その中に、「霸王樹」という一大結社がある。創立は大正八年八月(一九一九)、会員数は五、六百人あるう。ところが、この会を創立した歌人が、津和野出身の桐田露村であることを知ったのは、随分後のこととて、昭和五十年代でもあったらうか。大変に驚いたのであった。短歌人として、その後塵を拝する者が、地元出身の大歌人を今まで知らなかつたという認識不足をとても恥ずかしく、済まないことをしたという気持であった。

右書は戸田綾部氏什物を求め書写すものなり、尤もこの書は直地長下森氏とあり  
明和六己丑年(一七六九)之曆  
八月十六日之写取る。  
桑原東三郎久敬

は、明治十六年三月二十四日(一八八三)津和野町大字町田字滝ノ前(旧岩本久一宅)で、父桐田熙の長男として生まれた。長じて同二十六年、津和野尋常高等小学校尋常科を卒業、続いて高等科へ進むのであるが、父が大坂紡績会社(山辺丈夫創業)に就職することになったので、一家挙げて大阪に移ることになり、二十八年同校を中退し、大阪北野中学校に入学、三十三年同校を卒業し、上京して早稲田大学へ入学した。

たのである。私は在任中、迂闊にもそれに気付かなかつたことを大いに恥じた。神代種亮と言えば、明治、大正時代の作家、谷崎潤一郎、永井荷風、佐藤春夫、芥川龍之介等から「校正の神様」の称で重宝がられ、永井荷風の墨東綺譚に「神代帚葉翁」として現われる人物である。昭和二十九年、森鷗外詩碑の除幕式に來町した佐藤春夫が、その旧居(現市川毅氏宅)七松庵をぜひ見たいということと案内した処、その向いの道路上より眺め、しばし沈思して感慨を新たにした風であつたという。神代種亮はそれほど著名な存在であつたのだ。



▲茶ノ木台桐田家墓地



▲桐田露村夫婦墓

私が桐田露村を知つた頃、どういう切つ掛けであつたか記憶にないが、峰月堂前主人原田友一氏が露村の歌集二冊を持って訪ねて来られ、小半日桐田家との関係をお話いただいた。両家は町田滝ノ前町で、旧藩時代から隣合せの特別親しい間柄で、津和野を離れた桐田家の唯一の寄る辺になつていたようであつた。従つて墓地の管理、清掃は隣接地の原田家が今日もずっと続けておられるのである。

えるようになるのは、早稲田在学中、文庫「新声」への短歌投稿からである。これによつて尾上柴舟にその才を認められ、若山牧水、北原白秋、尾山篤二郎、古泉千櫻、橋田東声等の歌友をもつことになった。明治四十三年、若山牧水と雑誌「創作」の創刊に参加するが、後、退社して尾上柴舟の「車前草」に作品を発表し注目を集めるようになる。

てゆかねばならなかった。先ず大正十五年、四十五歳の時に、疲労衰弱し憂鬱病に罹つたことがその略歴に見える。さらに翌昭和二年、流患にかり、脚氣が更に昂進して苦しむことになる。翌三年、山陰朝日に発表した「故郷の歌」に

○いつならんだわらに行きてうかららと芋喰ひたりし秋の日思ほゆ

○高崩の赤土崖にあかあかと夕日が落ちし目に残りをり

○墓のべの檀の木の實につくひわを父とはごせし日も遠きかな

(註) だわら、森村後の茶ノ木台

高崩、たかくえ

竹ぐしや木の枝にもちを塗つておとりの傍に置き、小鳥を捕える仕掛け

歌そのものは最高級の歌ではないかも知れないが、望郷の思いのこめられた作品は、十三歳で津和野を去つた彼の素朴で、切々たる思慕が籠つて、心に沁みるものがある。本務である東洋紡績の社員としての仕事をこなしながら、一方では歌壇の重要存在としての活動に参画し、時には講

演のため地方に出張するなど、東奔西走しなければならぬ当時の彼は、心身共にくつろぐ違はなかつた。その無理が後年六十歳を迎える頃から糖尿病を発病し、余生の闘病生活が始まる。昭和十五年であつた。しかし、それからも決して寧日ばかりではなかつた。昭和十七年には日本文学会委員に選任され、各地での講演を依頼されて出向いて行く。

昭和十八年十一月、永年勤続した東洋紡績を退職したが、勧められて今度は北海道開発日満企業株式会社の専務に就任、昭和二十一年まで在職した後、やつと作歌と静養の時間が訪れる。しかしその後、短歌界での活動は続く。更に歌集「野鶴」を昭和二十七年十二月、霸王樹社より発行、作品七百三十三首を収めている。

ここで彼のひとりの側面を拾つてみよう。

昭和三十一年七月号の霸王樹路村追悼号によると「白哲長身、瀟洒な貴公子然たる人であり、あたたかくその中に清冽さも蔵した真に頼もしい感じがしていた。謹厳潔癖で

曲つたことの嫌いな人であつた。思いやりの深い親切な人であり周囲に集まる歌人達は慈父の如く慕つていた。先生はまた、書を能くせられ、あの雅味溢るる書体で請われるままに、短冊或は半折を書いて与えられた一等と関係者が述べている。

昭和三十五年六月十五日、宝塚市中山寺成就院に路村の歌碑が建立された。この寺は真言宗中山寺派の本山で、明治天皇御平産の勅願があつた名刹である。その除幕式に霸王社主宰の松井如流の称嘆の辞に「劫初から遠き未来へ果てなくつづく道、その一こまのように七十年の人間生活をなされた路村先生は、実に短歌にその全身を捧げられたのであります。しかも先生は、とほとほとひとりの道をひたすらに歩まれたのです。殊に晩年の十年は、病苦と戦いながら歌人として不朽の業を遂げられました。

○ふりかへる道の長手よ淡々とつづきて白しわが足もとに  
○長々と白き道なりふりかへるそれさへもはや雲に入るなり  
(二首省略)

とうたわれました。じーんと心の奥底にひびいてやまぬ歌ではありませんが、こうなると人間の心と宇宙の心との完全な融合を感じさせます。真に東洋的な寂寥を把握した稀なる歌人であつたと申さざるを得ません」と述べている。(後略)

歌碑に刻まれた歌は  
○さらさらと草のよれゆく風にそひ独りの道は思ひにあまる  
と自照の思い深い一首であるが、死去一月前の筆になるものという。

師であつた尾上柴舟は、路村の死の報に、

○むかし見し若き面にいくばくの老を加へて君しのばむかりも長くあるべき君はあらざりと霸王樹に寄せて悼んでい

るが(二首略)、柴舟の路村の生涯にかけた深い情愛もわかるような思いがする。

短歌の同志であつた橋田東声は、路村の長男勳に「秋霜烈日であるが、また愛情の気が身の回りにほのぼのとただよつている人であつた」と語つている。その他彼を知る人の、病弱で深い諦観を觀じ



とり、宗教的、哲学的な境地に己を止揚された人格やその歌である——という人物評、歌評をつけ加えておく。

なお落村の歌風について詳しく述べたいが長くなるので省略しよう。

昭和十八年、落村は望郷已むことのなかつた津和野の地を遂に踏むことが出来た。実に四十七年ぶりであつた。墓参のための五泊ほどの帰郷であつた。その時の懐旧と万感の思いを三男春彦に宛てた長文の手紙から一部を掲げる。

「十三歳で国を出て、宿望の故郷へ墓詣りすることを得た。四十七年の不幸者の哀れな姿を祖先の前にさらすにはあまりにみじめであつたかも知れぬ。富もなく名譽もなくと云う俗世界の願望をも達し得ぬことも一つのいたましさであつたか、然し僕の心持ちは、やはり生れた祖先の地へのあこがれが、そんなけちなものへの執着は綺麗に取り去つてくれた。子供の時の思い出の美しさを抱いて、どんなに胸のおどる心持ちをもってだんだん近づく故郷への汽車に待ったことだろう。車窓に

遠く地福あたりから青野山の禿げた丸い姿を見た時には思わず息を呑む気がした。

山川草木、皆僕の幼時の思い出でないものはない。駅にはすでに原田次郎が待つていてくれて、彼の家に荷物を置くと早速墓詣りをした。」

(後略)

この墓参の時、墓石に水をそそいで撫でながら、彼は涙を流し、長い瞑目をしてしばらく時を過ごすのである。

この帰郷が、遂にはじめてとなり最後となつた。この時原田次郎に贈つた

○大橋のふもとの松の幾代終しわがふるさとにまきに帰れりと岩本家に贈つた

○鷺が舞ふ祇園祭はけい水の瓶をかかへて我は見入りき

の二首が半切に書いて残されていているという。そしてこの手紙の中で、落村は「出来れば此処に小さな家を求めて余生を送り得ることがあれば……」と認めて、晩年を故郷津和野に帰りたい意向さえ覗かせている。

晩年、時期が詳らかでないが、山陰朝日に寄せた少年時代を懐慕する歌に

○昼休み横堀川をせきあげて叱られたりしこともなつかし

○新しき木履はかねば何となく

○止めおきをよく喰ひければ

○うちなびく春日がもとに幼

くてうど掘りゆきし龍帽子山

○城山の松の木の間にはご

けて目白を捕りし日は遙かなり

○運動会徳佐の峠につみとり

○白くほのけき一つ梅の花

○横堀の池のはちすの花咲き

て米原静子よく泣かしたり

の七首があり、共に切々と

伝わってくるものがある。

(註) 止めおき 罰のため放課後まで

運動会徳佐の峠 この件は不明

一つ梅の花 梅ばち草

米原静子 森鷗外の末弟潤三郎

夫人のこと

先に昭和二十七年、歌集「野鶴」が発行されたが、その後昭和三十年、落村が没するまでの歌四百二首が「閑雲」と題して昭和三十三年八月、日本文芸社から発行された。

一方落村の健康状態は、昭和二十五年頃から殊に思わしくなく、高血圧のため捨血して絶対安静を命ぜられるようなことも起こつた。昭和二十

九年からは家に引籠つてひたすら静養につとめるようになったが、翌三十年十二月十七

日午後、友人と対談中敢無く

なるという、いかにも哲人らしい

最後の時期であつた。遺骨は故郷津和野町森村字茶ノ木台の

桐田家墓所に納められ、夫婦墓として静かに眠っている。

法名 誠道院積清交落村居士

享年七十三歳であつた。

◎字数の都合で原歌を漢字に改めたものがある。

◎この稿は故岩谷建三氏より

頂戴した資料に負うものが

多かつたことを記して深く感謝申し上げます。

町なかを縫う清流。その先の山麓を走る汽車——煙突から黒煙を吐

き、動輪のあたりには蒸気が排出しながら、息

を弾ませて長い坂を登る機関車と

その車列。山口方面へ

向かうそれとは逆に、益田方面へ

向けて坂を降る列車の

余裕の走り——。

中学校の教室の窓越しに眺めた六十余年前の日常的な情景である。

「下り列車は坂を登り、上り列車は坂を降り」——汽車が自動車にかわつた現在も、その路線にかわりはない。

※

昭和十九年の四月、県立中学校に入学した。日原からの汽車通学が始まる。

津和野の町には、それまで知らなかつた、歴史と文化を感じさせる落ち着いた雰囲気があつた。

道の両側に並ぶ古い商家、そこを外れた辺りから道幅の広くなる殿町通り——かつて幾多の英才を輩出した藩校養

## 戦中・戦後の津和野

～ 汽車通生徒の回想記 ～

矢 富 彦 二郎 (松江市在住)

老館、家老多胡邸の門、異国情緒を漂わせ、それでいて、古風な町並みに溶け込んでいるカソリック教会の尖った屋根、掘割に遊泳する鯉の群れ——。

東方の空を画して、黙し立つ円やかで秀麗な青野山。西方の山上に昔日の偉容を偲ばせる三本松城趾。

山峡の閑寂な空間を充たす凜とした趣きは、この町で学べることになった少年の矜持であった。

その頃、太平洋戦争は既に敗色濃く、サイパン島の日本軍は全滅、大都市に疎開命令が下り、学徒勤労令、女子挺身勤労令が施行される。また、十七歳以上の男子は兵役に編入されることとなる。

追い詰められた戦局の中、神風特別攻撃隊の出動が始まったのも、東京が初空襲に見舞われたのもその年であった。街の店先の商品は、品薄となる。米穀については、既に配給通帳制となっていたが、逼迫した食糧事情のもとで、食堂や旅館などの客商売は暖簾を下ろすむきも多く、営業

を続けているものも、それは名ばかりの状態であった。

道を行く人の服装の大方は、カーキ色の国民服やくすんだ色のもんぺ姿だったし、髪型にしても長髪のハイカラ頭やパーマネットは国策にそわぬものとして影をひそめた。

地下資源の欠乏から、寺の梵鐘や家庭の仏具にいたるまで供出を命ぜられ、世情は日ごとに深刻化する。

あの頃、熱効率の悪い粗炭を焚き、煤煙を撒き散らし、喘ぎながら坂を登る蒸気機関車に、イモやカボチャを主食にしての自分たちの暮らしのイメージが重なったものだ。

翌、昭和二十年の六月には、沖繩の守備隊が全滅し、戦火は身近に迫る。本土決戦は時間の問題といつてよかつた。

上級生は主として県外で、下級生は県内での勤労作業に明け暮れ、学業は疾うに霞んでいた。

八月、広島に、続いて長崎に原爆が投下され、十五日には、「終戦」の玉音放送を聞くこととなった。

「国破れて山河あり」は、

杜甫の「春望」の一節であるが、幸いに津和野の町は戦災を免れ、山河は変容することなく戦争は終熄した。

※

再び汽車通学が始まった。客車に乗りきれず機関車にまで人があふれる買出し列車での行き遣りは、窮屈ではあったが、それでも解放感があった。

暫くは、混沌の期間が続き、それから、次第に町も落ちついて、明るさと活力が感ぜられるようになった。

その頃から、店頭にはつぼつ商品が姿を見せるようになる。だが、国の生産力は、まだ極めて弱かったから、街頭のあちこちで、古いモノを修繕・修理する商売が目についた。

蝙蝠傘の修繕屋、鍋釜の錆掛屋、靴の修理屋、それにキセルの管を掃除したり、取り替えたりもする羅宇屋などである。

声を張りあげ、先ずは注文をとり歩き、町家の軒先や路上の一角に陣取って作業を始める。細々とした営みだが、彼等の顔には、戦中の屈託の

色はなかった。

——「最早戦後ではない」といわれるようになった昭和三十年代に入ると、そうした商売は町角から追い追いに姿を消す。津和野の町もさらに活力を増し、観光に訪れる客足も繁くなり、盆地の小市街は、「山陰の小京都」として脚光を浴びることとなる——。

汽車での通学を終えて、津和野の町を離れたのは、昭和二十五年の春。

津和野にまつわる往時を回想するとき、その背景に思い浮かぶのは、きまつてあの頃の汽車である。

※

新しい世紀が明けた年の晩秋、久し振りに津和野を訪ねた。

朝方、旅宿を抜けて、町を散策し、錦川を跨ぐ大橋の上に佇んだ。石の欄干に身を寄せて、のぞく眼下の流れに、鯉やウグイそれに鮎などが昔ながらに群れ遊ぶ。

町並みを包む狭霧が徐々に霽れ、薄い陽ざしが川面に映える。清澄な冷気に、人々の暮らしの息遣いが溶けて伝わ

り始める。

程なく、辺りが俄に活気づき、通学や通勤の人たちで、橋上の往来が繁くなった。

(時は移ろい人は代わっても、目にする情景は、あの頃とそう変らない……) そんなことを考えていたら、軌条を伝わる軽やかな音とともに、横手の鉄橋を上りの列車が通過した。束の間の像を網膜に残して——。

(島根県文学連盟理事・山陰文芸協会理事)



鉄橋を下ろすS.Lの勇姿

# 狛犬さんの「阿・吽」

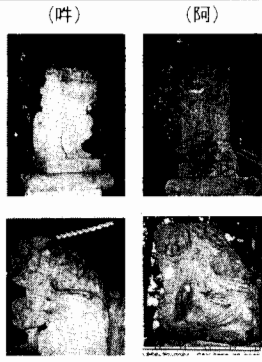
河野 晃

アウン

なん年前であったか、須佐浦庄屋の古い文書を読む事があつた。文書から毛利藩の宰判制度なるものを知り、案内下さる方に付いて、むつみ村の奥阿武宰判勘場跡を視て、諸所を廻り、古い由緒のある吉部八幡宮に参詣した。



吉部八幡宮 (延長8年(930)宇佐宮勧請)  
山口県指定天然記念物の大杉

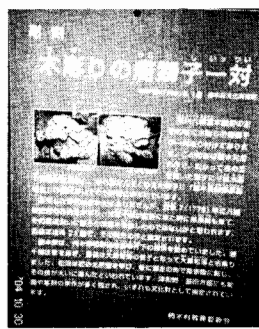


▲吉部八幡宮の狛犬

この吉部八幡宮の社前で、興味ひかれる一対の狛犬を見つけた。左側が獅子で口を開いている、所謂「阿」である。右側の狛犬は口を閉じている「吽」である。後方から能く見ると判り易いが、足もとに子犬らしい彫刻が見られる。

この八幡宮の勧請からみて、延長八年(九三〇)以降である、宰判勘場が置かれた位だから、古くから栄えていたに相違ない。

平成十六年十月三十日、参勤交代の道を通る《《笹山から星坂へ》》探訪へ参加した。

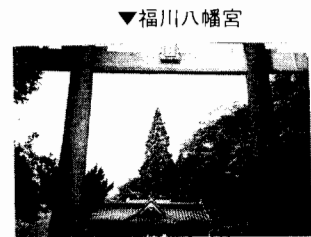


▲福川八幡宮と大島松溪



▲福川八幡宮の唐獅子の彫刻

柿木の福川八幡宮外陣に獅子鼻(建物の裝飾)左右一対の木彫り唐獅子が有る。向かって右の玉を抱いた獅子は「植木源十郎藤原直宣彫」、左の牡丹を銜えた獅子には「植木長植藤原直英彫」の刻印が背面に刻まれている。植木兄弟であるが、弟の長植は当時廿五歳の壮年であった。植木家は代々普請奉行のもとで棟梁を勤める家



▼福川八幡宮  
八歳、墓

碑共に中座門林に在る。



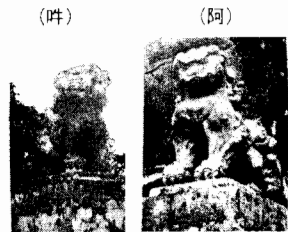
▲福川八幡宮の狛犬

の登り口に狛犬一対があり、右側の口を開いた「阿」の方は玉を踏んでいる。作者不明。平成十一年十一月廿五日、探訪団に加わり浜田亀山城に登った、城山域内に浜田護国神社があり、その入口の一対の狛犬は堂々として周囲に偉容を誇って見えた。



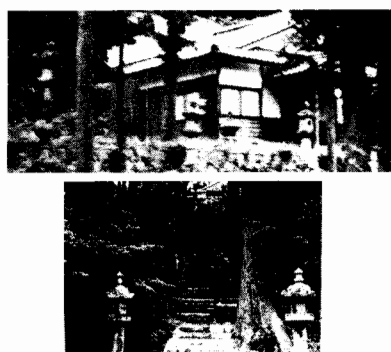
▲浜田護国神社の狛犬

鷲原八幡宮拜殿前に一対の狛犬が在る。作者大島松溪と聞く、凄味があつて流石名人の名作だと嬉しくなる。



(阿) (吽)

喜汁の津和野神社は久し振

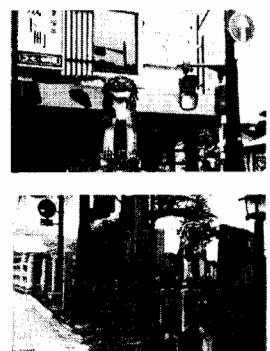


り。玄武社前の一対の狛犬は、藩士の奉獻のものと、その氏名が大分剥落して来た。今の内に記録したいものだ。



(阿) (吽)

稲成神社の狛犬一対(阿の方)に雄のシンボル)



(阿) (吽)

「狛犬」を辞書で引いて見る。神社の社前に据えられている一対の霊獣、神の守護と魔除けの為といい、いづれも厳めしい顔をしているが、つくづく見るとユーモラスな表情だ。その起源は獅子・ライオンといわれ、古代エジプトや西アジアに栄えたアツシリア(現イラク)などの王宮・神殿・墳墓等の入口に魔除けの為に置かれた人面獅子の石像・スフィンクスが原型と言われると成程と納得する。

これらがシルクロードを経て中国に入り、唐獅子ともなり、朝鮮から日本に渡来した。この異形の姿が日本の犬とは違う、外国の犬・高麗(朝鮮)の犬と呼ばれ、狛犬となった。本来獅子と狛犬は違う物で、平安時代は明確に区別されていた。獅子は、耳を垂れ毛並は巻

毛で口を開いていて金色また黄色着色。

獅子 (阿)



獅犬は一角で耳を立て毛並は直毛で、口を結ぶ銀色または白色で獅子と色わけする。

獅犬 (吽)



「栄花物語」や「枕草子」等によると、平安時代の宮中の御座の左右に「しし、こまいぬ」が置かれていた。御帳台、左右の帷の鎮子(重し)として用いられたものと聞く。

宮中を出て神社に移り、神殿は大扉前に、後には拜殿前にと段々外の方に出て、遂に鳥居前に鎮座する現状となった。

百獣の王ライオン其俣の姿は正倉院(七五〇年頃)で見られる由、遣隋使や遣唐使が中国から齎らしたものであろう。日本人が本物を見たのは、慶応二年(一八六六)正月、江戸芝の空地で、雌の獅子一頭を見世物としたのが最初である。

獅犬は一般的に阿吽一對と思われている。「阿・吽」は字母の初韻と終韻、即ち息の

出入、阿吽の呼吸で非常に息が合う表現に用いられる。

獅犬は本来両方共雄だった。獅子のたてがみは雄だけで、平安・鎌倉期の阿吽とも、雄のシンボルが付いていた。一對の内、獅子を雄、獅犬を雌としたのは徳川時に入ってからと思われる。

時代が下って古い時代の明確さが崩れ混合されて、現代は一般的に獅犬で通用する。獅犬が宮中の調度であった。平安時代は木彫であった。

東大寺南大門に蹲居の石造獅犬は、わが国最古といわれ建久七年(一一九六)宋人宇六郎造之と。

陶製獅犬は江戸時代に盛んとなり、雌雄別が造られた。

外に出た獅犬は、自然石造か陶製、時に金属製となった。沖繩のシーサーは、獅犬によく似ていて区別が難しい。

参考文献から沢山借用させて戴いたが、誤読不理解の点は御容赦願います。 己上

【参考文献】

前 久夫著「社殿のみかた図典」上杉千郷著「獅犬事典」

# 史 談 会

(津和野の歴史の勉強会)

日 時 12月9日(土) 午後1時30分～

会 場 津和野町民センター(講義室)

テーマ 「私の父」  
= 中 田 瑞 穂 =

解 説 河 野 晃 氏

## 編集後記

朝霧にすつぱりと包まれ、津和野がもつとも津和野らしい情感を湛える季節になりました。

この三十八号は私にとって二度目の編集となった訳ですが、御蔭様で力作揃いの原稿が集まりました。

各々、持味豊かな、この季節にふさわしい内容です。ご熟読下さい。

九月末、祇園町、本町筋の石畳舗装と街灯が完成し、長年見なれた電線電柱が姿を消し空も広がって殿町まで見通せる実にすっきりした町となりました。

然しながら、整備されつくして白の色調のさわだつ都会的、直線的な町に変貌しましたので、従来の城下町らしいしつとりとした風情のある町並という、うたい文句からはやはずれが生じてきたような気がします。

今後はこの違和感をどのような味付けによって、津和野らしい風致に手直ししてゆくかが町の方々に与えられた大きな課題ではないでしょうか。大きく期待されるところです。

尚、今回は女性会員からの投稿が皆無で誠に華やきを欠く結果となり至極残念でした。

掲載の号は確約出来ませんが、御投稿はいつでもお受け致しますのでどしどし持ってきてください。

(岡 田)

### ★本会へのご寄付

- 一万円 北村 伸一郎 様 (石川県白山市)
- 五千円 佐伯 五郎 様 (津和野町)
- 一万円 中尾 靖 様 (津和野町)
- 一千円 石 飛 弘 様 (奥出雲町)
- 一万円 三上 雅 祥 様 (萩市大井)
- 一千円 岸 田 銀一郎 様 (津和野町)
- 一万円 井上 正巳 様 (出雲市)
- 五千円 亀井 温故 館 様 (津和野町)

有難うございました